

人文フォーム 22

2005.3



CONTENTS

巻頭言

ダビデのまなざし

人文学部長 桑原 俊一 1

Essay

北海道のことばとそのルーツ

——静内、淡路、北の零年——

日本文化学科教授 菅 泰雄 2

トピック ブロック大学留学特集

カナダ・ブロック大学で英語を学ぶ

英米文化学科教授 岩崎まさみ 4

Essay

O CANADA 一若者に「自己を越える」情熱を

英米文化学科教授 井上 真蔵 6

ゼミ室紹介

私のゼミ紹介

英米文化学科教授 川上 武志 7

Essay

ロンドン便り

日本文化学科教授 中川かず子 8

第12回市民公開講座報告

..... 11

Essay

マイセン磁器とレッシング

英米文化学科教授 安酸 敏眞 12

大学院だより

文学研究科の完成へ向かって

英米文化学科教授 土屋 博 14

研究、その足跡

..... 15

編集後記

..... 17

巻頭言

ダビデのまなざし

人文学部長 桑原 俊一



フィレンツェ（イタリア中部トスカーナ州の州都）は14世紀以降、政治的経済的混乱の時期を経ながらも文芸運動の先進基地としてルネサンス運動の導火線となった。ゆったりと流れるアルノ川の渡河点に張り付くように2キロ四方の長方形状に拓けた小都市である。

もう4年ほど前になるが、私はこの都市を訪れた。フィレンツェ特有の街角の基調は灰色がった黄褐色の石にある。四季折々に川面に移る街の艶やかな陰影はメディチ家以来今も昔も変わらない。ルネサンスの畏れにも似た元気と初々しい自由を包み込んだ空気で充満している。

サンタ・マリア・ノヴェーラ中央駅から南東に15分も歩けば都市の中心ドゥオーモ（大聖堂）に着く。そこから真南に3丁ほど下ればグロテスクとさえ見える彫刻群像が現れる。シニョリーア広場である。かつて、このあたりは行政と政府機関が軒を連ねた官庁街であった。パラッツォ・ベッキオ（政庁館）の正面にはかの有名なミケランジェロ作「ダビデ（レプリカ）」が「ヘラクレスとカクス」と「ユデトとホロフェルネス（レプリカ）」に挟まれるように据えられている。テリビリタ（英語のterrible）つまり張り詰めたエネルギーが恐ろしいばかりに浮遊している空間である。底なしの恐れと剥き出しのままの熱情とが共存し、見るものを困惑と魅了へと誘いこむ。現在、実物の「ダビデ」像はドゥオーモから北方向10分ほどのアカデミア美術館で見ることができる。4メートルを超える巨大な白い大理石彫像である。ミケランジェロは、武具で身を纏った巨人ゴリアトを少年ダビデが粗末な武器で挑む姿（『旧約聖書サムエル上 17－1－54』）を彼と同時代の感性をもって彫り込んだ。

青年ダビデのまなざしはフィレンツェの将来に向けられている。恐ろしいほどの気迫を持って臨んでいる。下肢の肉体からほとばしる熱情は昇華し、まなざしに結実している。現在に臆することなく将来を見据える。人文学の原点はこのテリビリタにあるような気がする。混沌とした先の見えない世紀の入り口に立って、時代を切り開くテリビリタを創出していくことが学部に求められている。学生と教職員が一体となってネオ・テリビリタの担い手になっていこう。

北海道のことばとそのルーツ

——静内、淡路、北の零年——

日本文化学科教授 菅 泰雄

北海道には、明治以降全国各地からの移住者があったこともあり、方言の実験場と言わることがある。何といっても地理的に近い東北出身者が多いため、ともすると北海道の方言は、東北地方の方言と大差ないものと考えている人も多いようである。たしかに、東北方言の影響が強いことは事実であるが、それだけでは北海道方言のすべてを説明することは出来ない。

というのも、東北地方について北陸、四国、中国、近畿、九州などからの移住もあったからである。道内の地名には、「広島・十津川・鳥取・福井」など移住前の故郷の地名に基づいたものが多く見られることからも、そのことがうかがえる。道外から持ち込まれたさまざまな方言が接触して、いわゆる北海道弁が形成されることになる。その過程で、どんな要素が残り、どんな要素が消えていくのだろうか。まさに、方言の実験場である。

2005年1月、映画『北の零年』が公開された。徳島の支藩であった淡路の稻田藩の武士たちが明治4年に静内に移住してきた歴史を扱った内容である。この舞台になった静内には15年以上前に調査に入ったことがあり、昨年も再び調査する機会があった。稻田藩士の子孫の方や、その後明治18年にも同じ淡路島から日蓮宗の宗教団体が移住してきたのであるが、その子孫の方にもお会いして、その言葉を観察することができた。

また、徳島県からの移住者がいる本別町でも調査を行なった。淡路島は現在では行政上兵庫

県に属するが、言葉の面では「アワジ」という言葉が示す通り、阿波への路ということであり、広く徳島のことば（阿波弁）がどの程度残存しているか、どんな言葉が消えてしまったのかを、北海道方言や徳島方言の専門家、そして移住に関する歴史地理学の専門家などの協力を得て研究を進め、現在その分析を進めているところである。（写真）

90年当時、80歳であったMさんの、「シヅナイデ ソノコロワ ハ’ シモナイシ トセンダカラ カワ イマノ ハ’ シノ アノ フキンニ（静内でその頃は橋もないし、渡船だから、川、今の橋の、あの付近に）」という発話には、橋を「●〇」（高低）のアクセントが現れている。

去年の調査では、そのMさんのご子息（66歳）にもお会いすることができ、お話を伺うことができたが、そのアクセントには淡路のアクセントは全く残っていなかった。Mさんには「来たんやな」「下駄履いトルケンドモ」など淡路のことばが数多く残っている。

一方で、Mさんには「出しトルベ」のように淡路の「～トル」に東北由来の北海道方言である「～べ」が一緒になった表現が使われているが、ご子息の方は「～トル」は使われず、「～べ」が多用されているなど、いくつかの興味深い事実が見られた。

北海道方言の代表格である「手袋をハク」の言い方が阿波弁とも共通することや、御札を言われた時の「こちらこそ・どういたしまして」

に相当する阿波弁「どちらえか」という表現が全道各地で今でも時折耳にすることがある（我がゼミ学生の報告にもあった）が、北海道のことばを考える上で、移住前の故郷のことばとの関連を調べることは重要なと考えている。

人文学部学生諸君の出身地は全道各地にわたっているが、それぞれの故郷そしてその移住元のことばに关心を向けてくれたら幸いである。



科研費研究検討会の様子

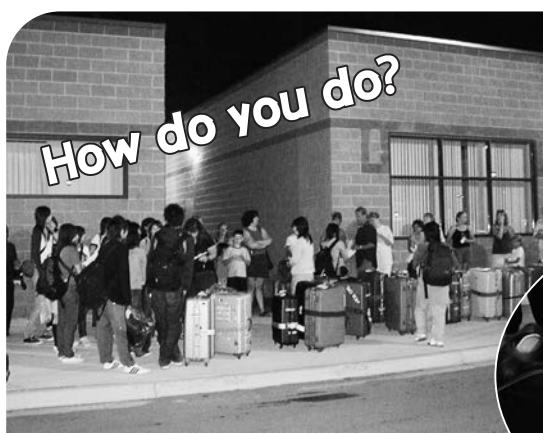
カナダ・ブロック大学で英語を学ぶ

英米文化学科教授 岩崎 まさみ

平成 11 年度に英米文化学科の学生を対象として始まったカナダ・ブロック大学での英語研修は、本年度で 4 回目を迎え、日本文化学科の学生も履修できる「国際文化演習」(2 単位) として、これまでより多くの学生たちが参加できるプログラムへと成長してきた。その間、トロント地域における SARS の流行により、研修旅行の実施を断念しなければならない年もあったが、平成 16 年度は計画通りに研修を実施することができた。研修の内容は英語研修とホームステイを中心としたプログラムとして、さらに充実してきている。以下写真を追って、プログラム内容を紹介しよう。



トロント空港から
ブロック大学へ向かう
バスの中



初めてバスで家へ帰ることにチャレンジ
「何番のバスに乗ると良いのかな？」



❖ブロック大にて、ホストファミリーの
歓迎を受けました

❖鮮やかな黄色のスクールバスで、いろいろなところに行きました

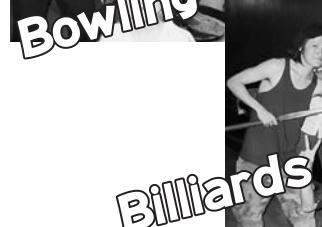


Niagara Falls

ナイガラの滝へ



ボウリングへ



バーでビリヤード

もちろん毎日英語の授業を受けました



❖3週間の研修を終えて、修了式。学長の飛び入りで、盛り上りました



❖ホストファミリーとのお別れで研修は修了しました



楽しい先生との
お別れはつらい



全員で修了を祝う

O CANADA

● 一若者に「自己を越える」情熱を

英米文化学科教授 井上 真蔵

ちょっと素敵な「近頃の若者の話」をお伝えしたいと思います。

東京の江東区の教育委員会では、姉妹都市の関係で毎年 39 名の中学生をカナダへ派遣しています。その中の一人が次のように述べています。

「ファミリーから学んだことを全てこれから的生活、高校、大学、就職と成長していく中で活かして、今の自分よりも、もっといい自分に変わらいいと思っています。これは、とても難しいことですが、でも、時間はかかるけれど頑張れば、きっと変わると私は信じています。」

カナダ人との生活が、中学生に「現在の自分を越えよう」という強い思いを抱かせるようになったのが、よく分かります。こんな風に「自分を変えたい」という体験は、そんなにあるものではないと思います。それでは、一体、どんな体験をしたのでしょうか。

若者たちが異口同音に言っているのは、カナダの家庭に見る「家族のあり方」とカナダ人の価値観です。それは、一緒に食事をする、散歩をする、と言った普通の生活の中に見たカナダ人のコミュニケーションのあり方や生き方が、日本の家族の場合と異なっている点でした。ある生徒は、「何かをすると必ず Thank you と言ってくれるし、Thank you と言うと必ず You are welcome と言ってくれる。自分は今まで、こんなに丁寧に人と接していなかった。」と述べています。そして、別の生徒は、「家族とのふれ

あいは、日本ではあまり気にしていなかったのですが、ホームステイをして家族のふれあいは、簡単そうで意外と難しい事に気がつきました。」と述べています。カナダ人の家庭では、家族が共にする時間が圧倒的に長く、家族同士であっても “Thank you.”、“You're welcome.” と言葉を交わす様子を目の当たりにして、日本での家族関係を考え直す切っ掛けとなるようです。さらに、散歩の途中、ホストファーザーが、急な斜面に捨てられた空き缶とペットボトルを拾うのを目撃した若者もいます。そして、「こんな光景、日本では絶対見られないと思いました。カナダを愛する『愛国心』の強さに私は圧倒されました。」と述べ、「そういう心の持ち主に感心させられました。とても立派なファーザーでした。」と感激の様子を表しています。

このようにして、わたしたち日本の大人が若者たちに教えてこなかったこと伝えてこなかつたことを、カナダの家庭に入り、教わるともなく教わっていると言うことができます。

以上は、若者が学んできたほんの一部分ですが、このような経験をするには、それなりの条件が必要です。つまり、「現在の自分を越えよう」という情熱と準備と能力が必要だと思います。上記の 39 名は、区立中学 22 校の代表で、それぞれが生徒会の役員や部活のリーダーです。受験直前の 3 でありますながらも、12 回の週末研修と課題なし、最終の宿泊研修では一つのチームを意識するようになります。このような十分な準備と能力があってこそ、カナダに接して、異文化が「見えてくる」のではないかでしょうか。

ゼミ室紹介

私のゼミ紹介

英米文化学科教授 川上 武志

本年度の演習I（ゼミ）の最後の授業が漸く終わろうとしていたときであった。「一時はどうなるかと思った。」ある学生が、ふとこんな言葉を漏らしたのである。一瞬、不意をつかれた気もしたが、それも宣なるかなと思い直した。

私の専門が英文学であるというところから、担当する演習のシラバスには、「英文学は詩歌をその精髓とするところのものである……詩と聞くと尻込みする人がいるが、それは食わず嫌いというもので、やってみると存外面白いものである云々」といった文言を掲げる。他国でもそうだが昨今「文学」の人気は凋落気味なので、あまり学生も来ないだろうと高を括っていると、毎年十人程度の希望者が現われる。そこで、やってきた当人達に聞いてみると、意外にも「文学が好きである」との答えである。それではと、彼（女）等に英詩についての経験について尋ねてみると、「皆無」との返事となる。以前、中学・高校で使われている英語の教科書を調べたことがあったが、扱う量の多寡はさておき、どのものにも必ず英詩のセクションが設けられている。しかし進学のための英語が優先で、英詩などは中・高での授業では扱わないのが実情である。「詩こそ言語における最上の表現である」と盲信（？）している者なので、「総合学習」の時間などでぜひ生徒に体感させてはと常々考えている。おもわず繰り言になってしまった。要するに、（英）詩の経験ゼロのところからゼミがスタートるのである。開講して何回かは、著名な詩人であっても比較的容易に入りやすく親しみやすいマイナーな作品を、私自

ら解説し説明することになる。なんといっても「文学」は、読んで楽しくなければならない（また、ある程度理解できなければ決して楽しいものではない）、読み手（学生）の「純粹な」興味に訴えるものでなければならないとも考える。「我々は自分の持つ趣味に誠実でなければならない」といった大文学者がいたが、これは分かりもしないことを分かった振りをするのはいけないということである。それでも、学生はこれまでに言葉の外延的意味だけの読みとりをしてきたせいか、詩が重層的意味によって複雑に構成されているものであることに大いに驚かされるということになる。「これは一体、どうなっているのだろう」と、途方に暮れるのである。

いわずもがな、「文学」は作品を読むことから始まる。そこで段取りとして、適当な詩作品を選んで、その都度レポーターを決めて、その学生に作品の解釈・批評してもらい、皆でそれについてデスカッションしてもらうことになる（との指示をする）。ところがである。学生は黙りを決め込んでしまうのである。かなりの忍耐が必要となる。しかしながら、授業のたび毎に適切な指示を与えていくと、次第に詩の読み方にも慣れてきて、季節がようやく肌寒くなる頃には、作品の解釈をめぐって結構活発な議論が飛び交うという次第となる。

ロンドン便り

日本文化学科教授 中川 かず子

(2004年9月～11月末まで在ロンドン)

外国人から見たロンドンの住宅事情の悪さは夏目漱石の時代から定評がある。漱石が始めに宿泊したと言われるロンドン大学ユニバーシティカレッジ（UCL）の前、SOAS（東洋アフリカ研究所）から道を一本隔てたGower Streetには今でも当時と変わらないほど「低価格」のホテルが並ぶ。しかし、安いと言っても一泊30～40ポンド（6,000～8,000円）はする。朝食だけ、あるいは朝食と夕食が付いているところもあるが、風格のある建物の外観とは違って部屋



の中は狭くて薄暗いので、文化・芸術の都に憧れてやって来た旅行者でなくとも長くは滞在できないだろう。

事程左様に、Bed & Breakfast（家庭または小ホテルでの宿泊）から高級ホテルに至るまで、宿泊料金は世界でもトップクラスの座を譲らない。留学生やロンドンの若者は大学等の寮に入ったり、アパートや一軒家を何人かで共有するなどの工夫をして生活している。観光客についてもイギリスのホテルに期待を裏切られたとぼやく人が多い。困ったことである。





ロンドンの住宅、公共交通、レストランなどの外食の値段の高さは広く知られているが、それでも世界中から観光客や留学生、研究員が集まるのは、やはり歴史、文化、芸術の伝統を大切にするお国柄だからだろうか。図書館、博物館、美術館の質と数量の充実ぶりは言うまで



もなく、映画館、劇場、コンサートホールの催しが年間を通じてぎっしり埋められ、しかも客の入りも多い。これらの人気は都会の人口の多さもあるが、値段がとても安いからであろう。図書館は別にして、世界最大規模のBritish Museum をはじめ、National Gallery、Victoria and Albert Museumなど入場無料の博物館、美術館も多い。また、現在でもODEON

という懐かしい名前の映画館がロンドンのあちこちにあり、どこも客の入りが多いのには驚いた。映画はもとより、ミュージカル、芝居、コンサートが日本に比べて半額以下で鑑賞できるのだから羨ましい限りである。書店を覗いてみた。十数年前にはDillonsというロンドン最大手の書店が今はWaterstoneに替わってしまったが、書店で発行する広告雑誌の内容が徹底していて興味深かった。それは、客が購買意欲をそそられるような、本の紹介とまとめ買いの奨めが美しい書籍の写真と文句で彩られているのである。人気の単行本は2冊の値段で3冊買えるとか、トルストイ、ディキンズ、E.ブロンテなどの名作本（ペーパーバック）が2冊で3ポンド（600円）というように。私ももう少し





こちらに長く滞在するのなら買いたいと思ったが、帰国に合わせて買った書籍を航空便などで送るとなると、購入価格の2～3倍になってしまって、残念ながら諦めることにした。

ロンドンはとにかく活気がある。金融、芸術、ファッション、学術……など多くの分野で世界中から人が集まっている。EUの統合によるヨーロッパ同盟国各国からの旅行者や商売関係者がここ数年多くなっているという。語学や芸術を学ぶ留学生も相変わらず多い。多文化、多国籍の人々が集まるロンドンは、彼らにとっても住みやすいようである。私自身も道を歩いたりバス停でバスを待っているとよく道やバスの行き先などを尋ねられた。外国人であるかどうかという区別をあまり考える必要がないようだ。これは、イギリス人自身が長い異民族、異文化の受容ともつれ合いの中で、次第に多文化

社会を容認してきたからであろう。しかし、教育現場、医療現場をはじめ、BBCなどの公共企業で多民族、多文化の人々の活躍が見られる一方、イギリス人不在という空洞化の起きている社会も出てきている。ほとんどイギリス人のいない公共の小学校、病院もある。ロンドン名物のタクシーは別にして、バスや地下鉄の運転手もインド系、アフリカ系の移民が圧倒的に多い。

私は三ヶ月の滞在中、特別「ガイジン」扱いを受けない心地よさはあったが、これから将来のイギリス社会、特にロンドンのような多民族社会の行方が少しだけ心配である。慎ましか、質実剛健、おおらかさといった、いわゆるイギリス人の良さも大都会では多種多様な人々の間にかき消されてしまうのではないか……と。しかし、一方で、彼らの外国人に対する寛大さはいつまでも残してほしいと願っている。



第12回市民公開講座報告

平成16年度の市民公開講座は、10月2日（土）から11月6日（土）まで開催されました。テーマと講師は次の通りです。

第1回 文学者の眼

—伊藤整『太平洋戦争日記』を読む—

野坂 幸弘

第2回 兵士の眼

郡司 淳

第3回 移動者的眼

テレングト・アイトル

第4回 ジャーナリストの眼

宝利尚一

第5回 宗教者の眼

—怨霊から御霊へ 鎮魂・慰撫の系譜—

追塙千尋



今年度の公開講座は、「戦争を見る眼」と設定して、講師それぞれの専門領域から個別に題目を定めてお話ししてもらいました。全5回の講演の要点は次のとおりです。

第1回：伊藤整の『太平洋戦争日記』全三巻を題材として、戦争がひとりの文学者にもたらしたさまざまな影響を、その作品にも関連させて考えてみる。

第2回：日本の近代国家が十年ごとに営んだ戦争の歴史を、兵士の視点、すなわちその日記や書簡などをもとにしながら、検証し、考えてみる。

第3回：十三世紀、マルコ・ポーロと無学祖先はそれぞれ別の場所で蒙古拡張に遭遇しそれを記録に残した。これを題材にして越境と横断、歴史と虚構の問題を考えてみる。

第4回：ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争をジャーナリストはどう伝ええたか。報道の具体例をもとに検証する。

第5回：前近代においての戦乱・政争とその犠牲者の慰霊の系譜を辿って、戦争と宗教の関わりという問題を考えてみる。



今年の受講登録者は47名(定員50名)。受講者は熱心に参加し、質問も毎回相次ぎました。最後に提出してもらったアンケートも、講座内容に肯定的な内容のもののが多かったということがあわせて報告しておきます。

マイセン磁器とレッシング

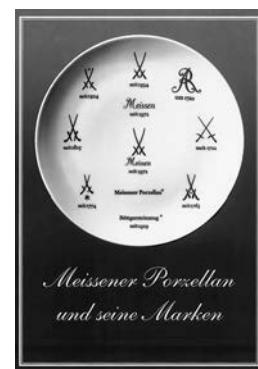
英米文化学科教授 安酸 敏眞

札幌には「マイセン美術館」があるので、マイセンについて知っている人も少なくなかろう（「札幌マイセン美術館」はサッポロファクトリー2条北館の4階にある）。京都で学生生活を送ったわたしは、大学院に入るまではマイセン磁器のマの字も知らなかった。ところが、大阪（吹田市）で開業医をしている叔父の家で、あるときマイセンのカップで美味しいコーヒーをご馳走になったことから、わたしとマイセンとのつき合いが始まった。そのカップには、一般に知られている「青い双剣」（サーベルが二本交差した形のもの）ではなく、マイセン磁器の登録商標としては最も古い、AとRが重ねられたような絵文字が描かれていた。ウェッジウッド、ロイヤルコペンハーゲン、ジノリなど、並みいる世界の高級洋食器のなかでも、なぜか清楚なマイセンに惹きつけられ、それからというもの叔父の家を訪れるたびに、よくマイセンのカップで上質のコーヒーをご馳走になった。

ところが、1980年に大学院を満期退学し、そのあとアメリカに留学するために、叔父の家を訪れる機会がなくなり、マイセンのカップでコーヒーを飲む優雅なひとときも味わえなくなった。英語力が十分でなかったわたしにとって、アメリカでの最初の二年間はまさに地獄のような日々で、とてもマイセンどころではなかった。山のように課されるreading assignmentをこなすのにあくせくし、ゆったりコーヒーを飲む時間などなかった。よしんばその時間があったとしても、そもそもこの超大国には、マイセン磁器に見合うような上質の

コーヒー豆はなかった！とはいものの、わたしはアメリカでマイセンと偶然の再会を果たした。当時、博士論文のテーマとしてトレルチ（Ernst Troeltsch, 1865-1923）の思想を取り組んでいたわたしは、その研究のなかでレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781）の重要性に気づかされ、あるとき図書館でレッシングの本を借りて読んだところ、何とマイセンはレッシングがギムナジウム時代を過ごした町であることが判明した。こうしてマイセン磁器の魅力が「真理探求者」レッシングへの関心と結びついた。

マイセンという名称は、ちょうど有田や伊万里がそうであるように、製造元の地名が商品名として定着したものである。マイセンはドイツのザクセン州のエルベ河畔にある小都市（人口約3万人）で、有名な文化都市ドレスデンからは電車で50分ほどで行ける距離にある（レッシングが1729年に生を享けたカーメンツも、ドレスデンの北東約40キロのところに位置している）。マイセンの地名を世界に高からしめたのが、ここで製造されている磁器である。ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世（通称アウグスト強王）は、極東の我が国からもたらされた伊万里焼の白磁に魅せら





れ、自らの領地でもこれに匹敵する磁器を製造できないものかと考えて、それを推進する特別な文化政策を展開した。その甲斐あって、幾多の試行錯誤の末に、1710年、「マイセン磁器製作所」がついにヨーロッパではじめて真正の磁器製造に成功したのであった。その後3世紀近く、改良を加えながらも昔の伝統を今に伝えているのが、世界に冠たるマイセン磁器である。

さて、わたしはサバティカル・リープを利用して、1999年6月9日から10日にかけて、憧れの地であるマイセンをはじめて訪れた。このときすでに学位論文「レッシング宗教哲学の研究」を完成していたので、レッシングとマイセンの関わりについても、より深い知識を有していた。「ドイツ精神史において完全に成年に達した最初の人間」と見なされているレッシングは、1741年から1746年までの5年間を、マイセンにある名門ザクセン侯立聖アフラ校で過ごした。ときの校長はレッシングを「二倍の森^{まぐさ}が要る馬」に喩えたが、やがてドイツ啓蒙を代表するようになるこの思想家が、将来に備えて習作に励んでいた頃、「マイセン磁器製作所」は染付たまねぎ模様（通称ブルーオニオン）を編み出して、ヨーロッパ随一の磁器生産地の名声を獲得しつつあった。レッシングはドイツ精神史上「最も男性的」な著述家であるといわれ、また「ドイツ国民の良心」とも目されているが、その思想的風貌はマイセン磁器に通じるものがある。両者に共通するのは本物に備わる気品である。こうして、わたしのなかではマイセン磁器とレッシングとは深く結びついている。

「マイセン磁器製作所」の一角にあるマイセン磁器の陳列館は、「札幌マイセン美術館」とは比

べものにならない規模と豪華さを誇っており、何千もの歴代のカラフルなマイセン磁器がところ狭しと陳列されている。それはまさしく壯觀そのものであり、食器や装飾品もここまでくると、それ自体がひとつの崇高な芸術であり文化である。マイセン訪問の記念に、カップとソーサー式を購入しよう商店に赴いたが、とても手が出なかった。仕方なくもう少し廉価なものを求めて街をぶらつき、ようやく気に入った飾り皿を一枚購入したが、所持金はほとんどなくなってしまった。その後、新たにカップとソーサーを2客購入したので、書棚と兼用している飾り棚が少し脹やかになった。わたしのマイセン磁器愛好は、同僚の知るところとなり、心優しい前の職場の同僚たちは、学科長の退職記念にと、マイセンの大きな花瓶を贈呈してくれた。さらに学部長からは可憐な一輪差しを頂戴した。こうして我が家家のマイセン・コレクションは都合5点となった。

我が家の経済事情を考えると、この先コレクションが増える見込みは当面ないが、幸い札幌にはマイセン美術館があるので、ときどきは目の保養に行きたいと思っている。ちなみに、東京の帝国ホテルのなかにはマイセンのコーヒーショップがあるが、一杯のコーヒーの何と高いこと！それにそこの常連客はレッシングのことなぞゆめゆめ思ふまい。マイセンファンは我が国にも多いが、わたしのようにその白磁に一八世紀の思想家を重ね合わせて、夢想に耽る人はまずはいないだろう。マイセン磁器とレッシング——本物は時代と場所を超えて永続する。



文学研究科の完成へ向かって

英米文化学科教授 土屋 博

2005（平成17）年4月を期して、大学院文学研究科に英米文化専攻博士（後期）課程を設置することが認められました。これでようやく本研究科では、二つの専攻が同じ形になり、その間で相互交流ができるようになりますが、この新たな設置は、同時に認められた法学研究科政治学専攻博士（後期）課程開設とならんで、本学の大学院全体の最後の仕上げを意味しています。3年後に全学年がそろえば、本学は、5研究科8専攻の完全な形での大学院と法科大学院をもつ国内屈指の高等教育機関となります。そもそも道内の私立大学で人文系の大学院博士課程を有するのは本研究科だけで、この状態は当分変わらないと思われます。それだけに困難も多く、責任の重さを感じざるをえませんが、各方面のご支援によって、何よりも質的な充実を心がけていきたいと考えています。

博士（後期）課程ともなれば、単なる語学力の向上や断片的な知識の積み重ねにとどまらず、高度で独創的な教育・研究の理念と体制をもっていかなければなりません。その点で、本研究科の「英米文化専攻」には、他では見られない特色があります。まず、「英米」という名称は、20世紀半ばに流行したいわゆる地域研究を後から追いかけるためのものではありません。今日では、よきにつけあしきにつけ進行するグローバリゼーションの波をしっかりと見据え、

その中からあらためて、地域文化の意義を問い合わせることが求められています。またそのさいの「文化」は、歴史・社会・言語・思想・宗教など、多様な切り口から総合的に探究される必要があります。ここに本来の文化論の原点があり、21世紀の人類の課題は、それを再構築し、共存の地平を拓いていくことではないかと思われます。さらに重要なことは、研究を行っていく主体が、たえず自らの立脚点を自覚することです。そのような自覚が欠落すると、研究が観念過剰に陥ります。従来の外国研究の問題点は、しばしばそこにありました。幸い本研究科の英米文化専攻は、日本文化専攻と緊密な連携を保っていますので、この点ではきわめて有利な条件を備えています。この利点は、逆から見れば、日本文化専攻にとっても同様に当てはまるでしょう。

今回博士（後期）課程開設にあたってそろえたスタッフは、道内はもとより、全国的に見ても画期的な陣容となりました。意欲ある若い研究者が加わり、このレベルを維持していくことができれば、本研究科が日本の学術研究に大きく貢献することは、決して不可能ではないはずです。実務の中で研究を蓄積してきた社会人の方も大いに歓迎しますので、この情報を知己の方々にお伝えいただければ幸いです。

■学会・研究会発表

岩崎まさみ 「平取ダム建設のアイヌ文化への影響調査について」12月11日、環境社会学会
濱(浜) 忠雄 「ハイチによる『返還と補償』要求をめぐって—『植民地責任』に関するケース・スタディ」10月、「『植民地責任』論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究」プロジェクト研究会、東京外国语大学
土屋 博 公開シンポジウム発題「日本の宗教研究の百年—キリスト教研究—」、9月、日本宗教学会第63回学術大会、東京大学
常見 信代 「スコットランドの国王文書を見る‘Feudal Settlement’」、12月、中世ブリティッシュ・ヒストリー研究会、熊本大学
Lorne Kirkwold “Testing for Course Evaluation and Development,” Presentation at JACET (Japan Association of College English Teachers) ◇ Presentation at JALT (Japan Association for Language Teaching).

■著作・論文など

テレングト・アイトル 「近代の衝撃と海—鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチョンガによって表象された『海』—」(上)『人文論集』北海学園大学、第28号、2004年7月◇「近代の衝撃と海—鷗外・漱石・魯迅・郁達夫・サイチョンガによって表象された『海』—」(中)『人文論集』北海学園大学、第29号、2004年11月
上野 誠治 「禁止を表す否定-ing節についての覚え書き」11月、『人文論集』第29号(北海学園大学)
追塩 千尋 共著『日本の名僧 重源』2004年8月 吉川弘文館
大谷 通順 『ドイツ、フランス、中国、ロシアとその周辺地域の言語と文化』(共著) 2004年3月、共同文化社
大瀧 徹也 「兵隊の眼—雑誌『兵隊』が問いかける世界—」1—21頁、(復刻)雑誌『兵隊』刀水書房、2004年7月◇「矢内原忠雄の目線」39—70頁、『無教会研究 聖書と現代』第7号
無教会研究所 2004年9月◇「矢内原忠雄にみる日本精神」71—116頁、『無教会研究 聖書

と現代』第7号 無教会研究所 2004年9月◇「アーカイブスは貌となりうるか」42—49頁、『アーカイブス』第17号 独立行政法人国立公文書館 2004年12月◇「地方公文書館の課題と使命」61—64頁、『アーカイブス』第17号 独立行政法人国立公文書館 2004年12月
小野寺静子 「尼理願の死去を悲嘆する歌」10月 『セミナーワン葉の歌人と作品』第十巻 和泉書院
濱(浜) 忠雄 「フランス革命とハイチ革命」2月、『文化アイデンティティの行方』(恒川邦夫他編・共著)、彩流社
宝利 尚一 「米欧メディアの戦争報道(上)」北海学園大学人文論集第29号(2004年11月)
Ian Munby Some issues, options, and recommendations in the testing of spoken interaction for students of oral and general English at universities in Japan. 2004.7 *Studies In Culture* no. 28 Hokkai Gakuen University, Sapporo. ◇ “We cruised through a terrible storm”. A review of *Vocabulary In Use: Intermediate* by Redman and Shaw. 2004.11 *Studies In Culture* no.29 Hokkai Gakuen University, Sapporo.

安酸 敏眞 「現代神学におけるレッシングの影」7月、『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第22号◇「トレルチ、マイネッケ、ローゼンツヴァイク—歴史主義の問題をめぐって—」(共著)、7月、『人文論集』第28号(北海学園大学)

米坂スザンヌ Teaching What, to Whom, How and Why? A Review of Japanese Pre-service EFL Teacher Beliefs. (Nov., 2004) Hokkai Gakuen University Studies in Culture,29.

土屋 博 「旅と宗教—パウロが歩いた古代地中海世界—」、9月、地中海学会『地中海学会月報』272

岩崎まさみ 「小型捕鯨の文化人類学的考察(2)：鮎川浜のケース」7月、『人文論書』第28号(北海学園大学)

■講演

大谷 通順 「小道といえども必ず観るべきものあり—中国文化における賭博遊戯」哲心六窓塾第39回10月例会、2003年10月

中川かず子 「北海道日本語教育ネットワーク10年の歩み」、7月、北海道日本語教育ネットワーク、北海学園大学◇「日本人と日本語—言葉を教える視点から」、9月、ロンドンさくら会（日本語教師会）、ロンドン大和基金（Daiwa Foundations）会議室◇“The Japanese Language and Culture”、11月、ロンドン大学東洋アフリカ研究所外国語センター特別講座、同センター◇“Japanese Studies by Early Westerners—From Portuguese Missions to British Scholars”、11月、ロンドン St. Paul's Girls' School

濱(浜) 忠雄 「ハイチ革命の歴史的意義」3月、日仏会館・日本フランス語教育学会共催ハイチ共和国独立200周年記念シンポジウム「ハイチ：革命とヴードゥーの国」、日仏会館◇「独立200年のハイチと『人類に対する犯罪』」11月、文化の日特別講演会、北海道開拓記念館

■書評

追塩 千尋 田中貴子「『渓嵐拾葉集』の世界」（『日本歴史』676号、2004年9月）

土屋 博 「辻学『ヤコブの手紙』」、9月、日本基督教学会『日本の神学』43

常見 信代 高橋哲雄著、『スコットランド：歴史を歩く』、2004年12月、『エール』24号

安酸 敏眞 「菌田坦『クザーヌスと近世哲学』」、9月、日本基督教学会『日本の神学』43

■評論・エッセイ

大瀬 徹也 「黒木あいさんの相貌」163－164頁、黒木あい牧師米寿記念文集編集刊行委員会編『大地の良心 黒木あい』2004年8月

小野寺静子 「古典散策『神さぶ』」11月『芸林』67－11 芸林発行所

土屋 博 「『さいはて』を生きる力」、8月、北海学園大学人文学部『人文フォーラム』21◇「『宗教』を『研究』するということ—宗教と宗

教学のせめぎ合い—」、11月、『中外日報』第26679号

中川かず子 「地域の日本語教室便り—北海道編」、10月、月刊『日本語』10月号、アルク

■その他

上野 誠治 2003.4.1～2004.3.21まで、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）で在外研修

大瀬 徹也 「来賓挨拶」6－7頁、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会『会報』第68号 2004年3月◇「公文書館における公開の諸問題—コメント—」23－25頁、『アーカイブス』第16号 独立行政法人国立公文書館 2004年7月

土屋 博 「編集後記」、8月、黒木あい牧師米寿記念文集『大地の良心』

濱(浜) 忠雄 「ハイチ、混迷の200年」3月、NHK-TV「視点・論点」、NHK

宝利 尚一 人文学部第12回市民公開講座「戦争を見る眼」第4回 ジャーナリストの眼 10月30日、北海学園大学教育会館

編 集 後 記

今回でひとまず編集担当から外れることになりました。この間、原稿や取材などでご協力頂いた方に改めまして感謝申し上げます。本当は、もっと充実した紙面作り（決して今が充実していないということではありません）を検討していたのですが、忙しさに取り紛れて実現できませんでした。来年度はきっとよりよいものになっていくことを期待しつつ春を待つことにします。

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな（古今和歌集・404）
(徳永 良次)

まさに光陰矢の如しで、札幌に来て早1年が経とうとしています。昨年の今頃は、岩手の自宅、大宮のアパート、そして上尾にある大学の研究室と、都合3カ所の引っ越しに大わらわでした。札幌は高校時代から憧れの地でしたが、より近いところに京都があつたために、結局は古都の魅力に負けて北大進学を果たせませんでした。山陰生まれのわたしは、こうして18歳から28歳までの10年間を京都で過ごし、その後アメリカとドイツに留学して、ナッシュビルとゲッティンゲンで暮らしました。帰国後は、東京と岩手に居住しましたが、札幌はこれまで自分が住んだ都市にはない独自の魅力に富んでいます。1年間「人文フォーラム」の編集に携わってみて、同僚の先生方の持ち味や癖がようやく少しあわかってきました。「ところ変われば品変わる」と思ったり、「いすこも同じ秋の夕暮れ」と思ったり、ともあれ1年間が無事過ぎようとしています。

(安酸 敏眞)

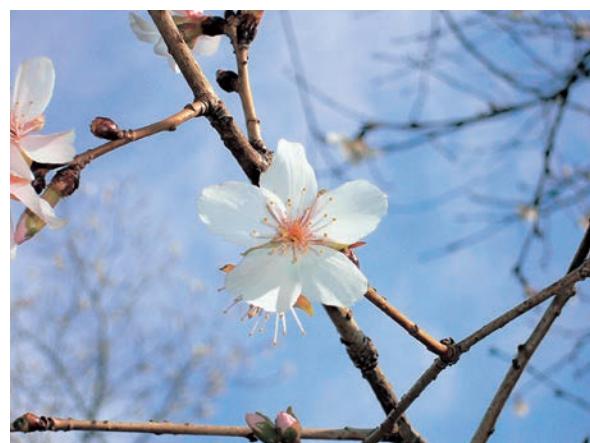


表 紙：日本文化演習で行った大阪の万博記念公園の梅林と竹林。

（2月28日撮影）

裏表紙：東京・小石川後楽園にて。

古来、梅は和歌に好んで詠まれた。